京都の古着

池田 圭佑
（2018年度入学　鈴木ゼミ2期生）

古着文化はここ数年で全国的に広がっている。今回は古着の歴史や魅力、また京都の古着屋についてレポートを作成する。衣食住のひとつでもある衣料品のリユースである古着の歴史は古くからある。その歴史は戦前から残るものであり、室町時代には絵画に古着屋が登場している。古来は原料の生産も限られ、布にするまでに多くの労力と時間が掛かったことから「ぼろぼろ」になるまで利用されていた。古着を『ボロ』とも呼ぶのはその名残である。古着としての利用価値がなくなったものでも、青森の「南部裂織」に代表されるように裂いて織り、再利用されてきた。高価な着物は質屋にも供されるなど、それだけ衣類には価値がある時代が昔から今まで続いている。そして戦後の物が不足した時代には、アメリカなどから大量の古着が輸入され、上野、浅草界隈で軍の払い下げと一緒に背広、シャツ、ズボン等が販売されるようになった。当時の人々は物が不足している中、着られればどのような物でもありがたいという思いがあったのかもしれない。こうして古着の歴史を振り返ると、当時の古着は生きていくために必要な「生活必需品」という認識が強い気もする。京都の着物文化なども、古くから伝わる歴史が現代の古着へと繋がっているため、京都らしい古着文化が生み出されているのだろう。

長く「再利用・リサイクル」の認識が強かった古着のイメージは、1970年代をきっかけに「ファッション」の側面を持つアイテムとして重宝されるようになる。背景は、音楽好きな一部の人々、アメリカで登場した文化の「ヒッピー」等に興味を持つ人が現れたことだ。それ以降新品では見つけられなかったアメリカスタイルを古着に求めるようになり、東京・新宿に古着屋が並ぶようになった。

【南部裂織で裂織した布】

誰にも似ることのない「個性」を追い求める人々にとって古着は最高の自己主張アイテムとして大きな魅力があるのだろう。さらに1980年代後半から1990年代初頭にかけての「バブル時代」をきっかけに、古着に「骨董品」の概念を取り入れた「ビンテージ・ブーム」が到来する。このブームでは約100年前の古着が数百万の価格で市場に出回ることも増えていく。新世紀に入ると「循環型社会」の到来「再利用・リサイクル」の概念が古着文化で復活する。古着文化の中身は違っても、その時代に流行ったものは、巡り巡ってまた流行するということも、古着がもたらすファッションの魅力であり、古着の歴史に対しての尊敬なのだと思う。

このような歴史が現在まで引き継がれ、東京の下北沢に高円寺、名古屋の大須、大阪のアメリカ村、京都の御幸町通りなどに渡り、全国的に古着ブームが広がっている。ではその魅力について、私がよく行く京都の御幸町通りにある古着屋を思い浮かべながら語っていこうと思う。私は地域によって古着のジャンルや古着屋の雰囲気が違うと感じている。

先に述べた下北沢、大須、アメリカ村、そして御幸町通り全てに訪れたことがあるが、それぞれ雰囲気が全く違う。一口に「古着街」としてまとめられるほどではないと身に染みて感じている。では地域ごとにどのような魅力があり、それぞれどのような違いがあるのかについて私が感じたことを述べようと思うが、今回はテーマが「私の好きな京都」であるため、京都の古着屋についてだけ私の意見を述べる。私が思うに京都の古着は一言で表すと「上品」というイメージがある。京都の古都の街並みが「上品」というイメージを彷彿させている影響もあるが、古着屋に置いているアイテム自体、上品さが漂っている。

【古着屋MILOUKYOTO】　　【森マーケット】

古着屋にも大型のチェーン店舗から個人営業の小型店舗まである。チェーン店はどの地域でも基本的な形態は同じであるが、上記の写真のような京都に出す個人営業の古着屋は、京都らしい上品さが強いような気もする。特に服は、いわゆるストリート系と呼ばれるようなヒップホップテイストを意識した系統の服ではなく、上品なビンテージのシャツなど、パンツもスラックスやスーツなどのセットアップが多い。他にも服だけでなく、これはどの古着屋でも言える事だが、古着屋にはバッグやアクセサリーも並べられている。そこでも京都は他の地域では置いていないようなビンテージのバッグやアクセサリーが多い印象だ。私はこの京都のスタイルを、中世ヨーロッパの上品な貴族が身につけるようなスタイルだと認識している。何度か京都の古着屋に訪れたことがあるが、やはり全てのアイテムが京都でしか置いていないようなものばかりで、どのようにして買い付けを行なっているのかが毎回気になる。今回は京都の古着屋についての魅力しか語ることができなかったが、他の地域に古着屋にもそれぞれ個性際立つ魅力があるため、皆さんにもぜひ多くの古着屋をめぐって欲しい。

日本では室町時代から発展してきた古着は、着る以外にもリサイクルとして社会貢献に関わり、芸術作品としても知られるようになってきた。着られなくなって捨ててしまうはずの服がさまざまな方法で活用されているということを頭に置き、京都をはじめ、多くの古着屋を巡りたいと思うようになった。